竹植や五月の雨のふりこゝろ　三河　道甫
栗の花咲や五月の雨のひま　仝　仝人
踏迷ふ山田の道や五月雨　東京　勇生
五月雨やほいろ世話敷茶のほうし　仝　高月
五月雨や篠をしらぬ草の丈　埼玉　鷺溪
五月雨やしげる軒端のしのふ艸　栃木　彌一郎
五月雨や曾我の話に小半日　遠江　窓月
鐘の音も漏れて聞えつ五月雨　茨城　祐孝
粟津野を内侍の夢や五月雨　遠江　支荷
桑植て根付も早し五月雨　東京　高月
月星も曾我の涙か五月雨　茨城　文教
五月雨の晴間をまつや星月夜　東京　せん平
五月雨や窓に取つく艸の蔓　栃木　萬
池水のまさりもやらず五月雨　東京　草臥
おき石に苔蒸す頃や五月あめ　遠江　窓月
五月雨やくれても白き涙のうへ　長野　抱月
五月雨や雷逃し跡のはれ　越中　惟子
なんとなく隣の遠し五月雨　東京　三親
五月雨やこゝろの沈む旅の朝　長野　華遊
堆き机の史や五月雨　東京　霞雪

六印ノ部

五月雨ははつきり見えす富士筑波　東京　量行
焚く香の烟もあはし皐月あめ　東京　木呂子
五月雨の晴間や田子の深みとり　三河　鼎翠
五月雨やはれを待間の賭の機　東京　園翠
雲よせて雨にあめそふ五月哉　埼玉　祐田

卷中感吟

人

鳴鵲五月雨霽すすかたかな　神奈川　照瓦

地

重きなかこつ簑笠や五月雨　栃木　瓢固

天

小半日五月雨で居つ沼の鷺　東京　晨柳

軸

焚く龍朶の蟬泉し五月雨　點者　夜雪庵金羅

布教通信

西征錄

於漢城駐洞　田中塵外隨行筆記

青魚洋に入る

朝來雨らんとして降らす、晴れんとして亦た晴れす、陰雲時に低く下りて、天地爲めに暗き五月第三日、待ちに待ちたる釜山仁川行の汽船、神戸より回航しぬ。權大敎正渡邊繁雄外數氏に送られて、玆に長崎の客舍を出て、直ちに小艇を便して、本船に移る午下第三時、船は日本郵船會社傭獨逸汽船潮洲府號、元と荷物運送船にして、近時遽かに其の一部を割いて客室と爲し、

上中等の設けなく、從つて不潔不整甚たし。殊に客歳東洋の風雲漸く動きてより、大帝國の名聲、大陸に喧傳せられ、國民膨脹の結果は、歩を海外に移すもの、日に多きを加へ、此日の如き、亦た二百餘名の渡韓者を見る。而して又た其の多くは通商移住を以て目的となすか故に、手廻荷物の多き、尋常旅客の如くならす。非常の雜沓と窮屈とを以て、予等は辛ふして荷物室の一隅を占領し、僅かに膝を容るゝの所を得たり。

船は錨を抜き瓊瑤の浦を放れ、船客は早や喧々たる談笑を始めぬ。嘗て油樽干魚等を積込める假客室は、「酢司」をつけたる如き、船客のつく息ひく息に由て、言ひ得へからさる臭氣充滿す。予は急き「甲板」に竄れぬ。時已に哺を過き、濃雲散し去つて、淡靄低く迷ひ、薄絹に包める如き月色神鏡の如く、面を撲つて寧ろ暖かき潮風は漣漪を起して金波細かに動く。天草洋上の夜航、予は所謂天然の美に打たれしもの、恍として恰も夢の如く、逍遙徘徊、微かに「山陽」か「雲耶山耶」の詩を誦し、一句を吟する毎に、極めて其の眞景を描寫せるに感しぬ。

九時過くる比ほひより、波稍〻高く、一片の浮雲、玉兎の君を奪ふて、水天爲めに黑く、夜氣蕭然として衣袂を襲ひ、久しく立つ可からす。顧れは甲板上亦た一の人影を見す、獨り船員の柁を轉するあるのみ。乃ち去つて船房に入れは、滿客多く既に夢に落ち、氣罐の水沸きて習々の聲をなし、機關の車搖きて轆々の響を發す。

困臥一睡、覺め來つて甲板に上れは、幾十の船客、早く既に快晴の天光を仰けり。船は快駛して挑曉對州嚴ヶ原の港を過き、潮勢一變、高麗海峽を度り、所謂青魚洋に入り、玆に始めて大日本帝國を辭するに當り、遙かに故山君上父母の邦を拜す。

釜山港

洞門の如き、浮鼇の如き、幾多の奇礁、無數の小島、波間に碁布羅列する所之れを青魚海と稱す。巧みに其間を縫ふて、船は漸く古三韓の地、朝鮮慶尙道南岸の一港に着せり。我が對馬を距ること僅かに五十餘浬、本邦に最も近き、且つ最も古き外國開港場釜山即ち是れなり。天氣清朗の日、對州の東端より水波漂渺の間に、其の近傍の山岳を望むを得へく、九州地方の人民は一葉の漁舟に帆かけ、其間を往來する程なれは、我か居留民頗る多く、全港の商權は、概ね我商人の掌握する所となり、物價の如き、畧ほ內國と同しく、宛然日本

の殖民地にして、毫も不自由を感するとなし。頃日又た長崎の人某、釜山に渡り、水道工事を起し市内到る處、清水の湧出するを見る。

山多くは赭山禿丘、獨り居留地の右に一丘あり、亂松亭々として千章蓊鬱たり。石階を攀ぢ登ること八合、一祠あり、金刀毘羅神社と匾す。蓋し居留民か產土神とし、公園地となす所。祠官其の麓に住す。登つて其頂に臻れは、廣さ凡そ三十坪許。一面の平地あり、傍らに木標の大なるもの立つ、仰きて之を見れは『遙拜漢城遭難之士標』と記せり。一拜往年の事を回想し、延て今回の事に及ひ、更らに雞林の前途を想ふ、思ふて茲に至る、忽ち慨然、更らに愴然たるものありき。

海上二晝夜

船停ること四時、釜山を發して西航し、夜間慶尙道近海を過きて、昧爽全羅の沖に入れり。巨文島を右舷に見て、船の駛る所、幾箇の青螺、無數の小島、送迎するに遑あらす。山姿水容、雄大にして絕佳、航海妙らしき予は、貪り見て飽くを知らす。

韓人朴琪俊といふもの、曩に留學生百餘名を督して本邦に來り、長崎に於て相知り、予等か便船を待てるの間に、彼れは東都に行き、歸途不圖同船するに及ひ、彼れの日本語に熟せるを以て、共に食後の運動を甲板の上にとりぬ。又た慶尙道某縣の府使（本邦知事の如きもの）吳承模と云ふもの、夫人及ひ童女一名を隨えて、京城に上らんか爲めに、釜山より乘船せり。馬尾毛を以て細かに編みたる帽を戴き、雪白練絹の袗を穿ち、牛皮履を踏み、鼈甲緣、水晶石英の大眼鏡を掛け、長烟管（四尺に餘るもの）を啣み、年齒未た三十を出です。朴琪俊は彼れか爲めに船房の斡旋をなし、且つ彼れを予等に紹介しぬ、彼れ毫も日本語を解せす、乃ち予は筆を執り、總てを手帳の上に問答せり、幾多應答の末、予は彼れに今回渡韓の目的を告けぬ。彼れ素より神道なるものを知らす、予は苦しんで不能の漢文を以て、彼れに說くに神道の起原、及ひ我か實行敎の敎旨、佛耶兩敎に異なる所以、日本帝國國躰の仍て立つ所以の梗概を示せり。彼れ再三再四注視熟考の後、僅かに解せるものゝ如く點頭數回、予に謝するに、日本國の義俠深き、東洋文明の先進者なることを以てし、又た一言の予か苦しんで說明したる神道の事に及ばず、予を目して、京城に行きて官途に就くものなるべしとの臆斷をさへ下すに至る。韓人由來官尊民卑の極に達せるもの、彼れ位、三品に上り官、府使にあるものに

して、猶ほ且つ甚だ事理に暗き斯の如く、予か帽を借りて戴き、予か上衣を乞ふて被り、予か時計の價を問ひ、更らに予に卷煙草の割與を請ふか如き、品位自から下れる斯の如し、其官にあらさるもの、中以下に衣活するものゝ品行理想また推知すへきのみ。夜に入りて、月色朗明、金波搖々、靜かに起て「甲板」を歩すれは、凉爽云ふへからす。更闌け人定まつて、猶ほ去るに忍ひす。

翌終日海上に在り、船は舵を轉して北行す。午後天曇り、夜に及んで小雨至る、滿客船房に在りて、呻吟殆んと航海に倦む。適ま予等の同室に、義太夫を能くするものあり、衆に推されて一二段を語り、其の新作の李鴻章苦悶の段を語るに及んで、拍手大に起り、韓人二三、亦た興に乘して彼國の「俚謠ありやらん、ありやらん、あらりよ、てやろ」を唱ふ、其聲凄悅。

六日の天、ほの〳〵と明けぬ。夜雨名殘なく晴れて曙光耀々。水の舷に當つて碎くるところ、宛かも白鷺飛行の觀を呈す。船は進んで豊島の近海を駛る、之れ宣戰の　詔勅以前に於て、日清交戰の手始めとして、將たまた軍陣の血祭として、客歳七月、砲烟舞ひ彈雨飛ひ、最初の大捷を占めたる所。擊沈せられたる高陞號は哀れにも、折れたる檣を海面に露はして當日の餘波を見せぬ。甲呼ひ乙傳えて船客は悉く甲板に馳せ上り、指し望みて、幾度か其の戰況を繰返しぬ。

午後第三時船は仁川の港に入る。航海三晝夜、風靜にして波穩かに、恰かも平地を行けるか如くなりき。

仁川港

稅關の官吏來り、朝鮮の巡査亦た來り、乘船の折に比して二倍せる雜沓は始まれり。予等は入港の前、早く行李を介して舷頭に立ち、投錨後直ちに端艇に乘つて上陸し、韓人の背上行李を負ふて案内するもの一人を僦ふて、旅館水津に投じぬ。

快浴一番、旅裝を更めて市内を散策せんと欲し、將に出てんとするや、旅館の別室に、三四洋裝の紳士か小驛を催ほせるを見る。曷むぞ料らむ、其驛の主人こそ、嘗て管長か世界宗教大會に臨める折、米國桑港駐劄領事にして、懇切斡旋の勞を執られし珍田捨己氏ならむとは。氏は本年二月より當港の領事となり、覺えの手腕を揮ひつゝ、鋭意事に從ひ居らるゝよし。席にある客は、此日を以て仁川に寄港せる某國軍艦乘込將校にして、氏か招聘に應して來れるなりと。氏は速く管長を認めて其席に請し、互に久濶を序し奇遇を語る。

翌朝管長は、特に領事館に珍田氏を訪へり。
仁川安着の報道書狀三十餘通を認め、內地各國教長に宛てゝ出す。
日本居留地を下つて、各國居留地の傍らに出て、韓人の露店あり、牛豚肉、生魚、干魚を排列し、交ゆるに野菜二三種を以てす。その烈日に曝され、塵埃に塗れ、急戰の如き蒸蠅をはらひもやらず、左れは肉は腐り、菜は皆な枯る。白衫の韓人は、帽を嶽かめて徘徊佇立し、機軍（勞働者）の徒、其の傍に亂醉困臥し、雜然喧然たる所、一種の羶氣大空に充滿す。予は彼の朴琪俊を『監理衙門』に訪はんとて、圖らずも此處を過きり、奇臭鼻を衝て腦に入る、急き手巾を以て鼻端を擁し、追れて一丘を登り行く數十步、禪寺山門の如きあり、扁して『監理衙門』といふ、乃ち入りて刺を通し、朴氏に面し語ること數時、其京城に上るの日は、同行せんことを約し、乃ち歸る。途書籍店に寄りて、東京新聞二三葉を購ふ。
居留地の右方、數丁にして日本公園あり、客歲我軍の幕營したる所。內に　皇太神宮を祀る。居留本邦人の信仰殊に篤く、戰勝の祝會、亦た神前清きところに催せるもの數次。此月十九日、戰勝祝祭を兼ね、盛なる例祭を執行すへき計畫中にて、市民は準備に忙はしかりき。吁本邦人の海外に在るもの。必らず敬神の念篤き所以、自から其の特性を發揮して、吾人の意を强ふするに足る。

漢城に向ふ

天明け衾を蹴て起れば、濃霧曙光を遮り、冷氣肌に薄る。陸路馬を僦ふて漢城に向はんと欲す。宿に命すれは、直ちに駑馬一頭を拉せる韓人來つて門に待つ。其道程を問へは、韓里八里と稱す。予等乃ち沿道の勝景を看且つ行かんと欲し、馬背に行李を乘せ、韓人をして東道の主たらしむ、馬は高麗產の駒にして、躰軀小なりと雖も、擔力太た强く、之を策つの馬夫亦た健脚、速きこと走るか如し。予等は彼れに尾し、爲めに數十步を行く每に、一回の疾走を要す。一道の大路、京城に通すと雖も、丘を度り、樹を穿ち、水を涉り、坡を回くること三里許。高丘に登りて下瞰すれは、路更に嶮なるあり。追走せし予等の勉强を言語不通の馬夫は、愈策を揚げ進む。予等是に於て渴する甚たしく、吹筒の水、既に軍を殘さす。濃霧漸く晴れて、初夏の日光腦上を照らし、更らに苦熱を覺ふ。
亭午を過き一時、二時に近からむとす。時に饑渴交々

臻る。加ふるに長程の歩行に馴れさる予は、靴に足を食はれて痛み亦た甚たし。無情の馬夫は、悠然烟を吹て、既に數丁の前にあり。須臾にして梧柳洞に着す。梧柳洞は一小敗驛にして、人家僅かに十數戸、中、日本人の旅店あり、朝鮮飲食店あり、客は晝餐を喫し、馬は一日の秣かふ。京城仁川間道程十數里、實に此小驛あるのみ。他は皆な荒漠なる山野にして、旅店の脚を休むるの處なし。予等亦た此處に着して、携ふる所の食器を開き、數顆のビスケット、及ひ數椀の澁茶を得て、殆んと蘇生の思ひをなせり。

人馬共に飯し終る、乃ち復た程を發す、荷を安排して、管長を馬に乘ぼせ、他に僦ふべき馬なく車なく、予は已むとを得すして、勇を皷して尾行す。平田低丘、頗る本邦田舍の景に似たる所を行く三里、京城の手前凡そ一里の處に達し、漢江の流れに至る。幅數十町、砂白く水清く、風景愛すへし。

渡船場あり、韓人之を官渡と稱す。渡り盡す所麻浦といふ。往昔鬼上官加藤清正の涕泣せし處にして、又た明治十七年の亂、井々居士竹添公使一行の苦戰奮鬪せし所なり。

遙かに南北兩漢山を望み、翠柳青松滴らんと欲する處、行路迷はす、管長に後るゝ半晌、京城南大門を入り、泥峴(日本人居留地)に至り、旅館東京館に投す、時正に午後七時。

辛ふして晩餐浴湯を了へ昏々仆れて眠る。

漢城

予等は漸くにして朝鮮國京城に入れり。着京の夜を徹し超て翌日、始めて漢城に於て倭城を見、王闕を望み、鐘路を歩し、南山に登り、或は官立學校を參觀し、守備軍隊を訪問し、或は公使館を見舞ひ、領事館を訪ひ、日本顧問官の寓を叩き、或は舌人を拉して韓人の家を見、或は知人を尋ねて迂路に彷徨せるなと、事歴頗る多し。

韓の俗

予は先つ茲に韓俗の一班を記せんとす、予か嘗て内地に在りて、之を人に聞き、之を書に見たるものを、今ま實際に目擊して、其の豫想を超ゆるの甚たしきに驚けり。是れ實にこの韓の俗なり。時に内地と異なる數點を列記せむ。

○韓人の妻を有するものは、髪を結ひ、帽を戴き、妻なきものは、皆な髪を編みて、之を背に垂れて帽なし。

○婦人の市に出つるや、皆な被衣を頭上より掩ふて歩す。衣裳は紅、白、青の絹布、或は「キヤラコ」にて製る輕簡なる筒袖大袴にして、恰も洋裝の婦人の如く、をしなへて美色なり。

○韓人の物を運ふ、皆な背子に載せ、水を汲むも亦た同しく、天秤を背子に結ひ付け、兩端に水壺を釣る。而して其重量凡そ三十斤位を積むて、毫も苦しむ色なし。婦人は總て物を頭上に載せて行く、量の何十斤なるを問はす、又た方二三寸のものと雖も、之れを頭上に置く。

○婦人の行くや、尚ほ男子の如く、足を外輪に踏み出し、前瑣の習慣あるか故に、身躰は一直線なり。少しく在方に出つれは、予等外國人の來るを見るや、直ちに避けて門内に入り、其の避く可からさる折には背面して立ち、後ち直ちに却走す。

○日本居留地に人力車あれとも、嘗て韓人の之を僦ふものあるなし。貴人市に出つる、必らす轎に駕る。轎は底に棒を付け、舁くにあらすして提るなり。他は多く徒歩するのみ。

○韓人は唐辛、及ひ蒜を好む甚たし。總ての食物、悉く之を用ゆ。故に彼等の身躰、悪臭斷えす、其の唐辛を好む、不知不識の間に、「ペチルス」を減殺す、天然亦た妙なりといふべし。彼等は牛の頭の角の生へたるまゝ、之を熟烹し衆人圍みて食ふ。

○飯器は多く真鍮の大さ「とんぶり」の如き碗を用ゆ。之に飯を盛る山の如く朝夕二飯。殆んと本邦人二倍の量、飯に匕を用ゐ、菜に箸を用ゆ。

○韓の山野樹木に乏し、日常の家具皆な土器、或は瓢簞。

○貴人の外は茶を喫せす。賤者は未た茶あることを知らす、年中水を飲む。其水は悉く鹹味あり、蓋し尿水流れて河井に投せるもの。

○溺と糞と、韓人は見て以て汚穢のものとなさす。家に厠あるなく、馬矢人糞、路に狼藉し、婦人の多くは溺を掬ひて顔を洗ふ、蓋し皮膚を細緻にするといふ。

○彼等は人と對話して、毫も顧慮することなく、坐右の便器を執りて、之を股間に置き、且つ撒し且つ語る。予の知人某、嘗て某官衙に顯官を訪ひ、談國事に及ひ、頗る眞面目なりき、顯官軈て便器を執り、彼の如くして平然たり、某その國習なるを知らす、勃然として匆々辭し還りきと。彼等は又た鼻液をか

むに紙を用ゆるを知らず、所謂手鼻なるもの頗る巧なり。而して其の指を壁上、柱邊、門扉、處を撰ふことなく之を摩つけ、貴人は美服盛裝の時と雖も、之を膝に塗る、爲めに膝邊方一二寸、常に麗澤を發せり。

○晴天には靴（支那靴に似たる）及ひ草鞋（靴の形せる）を穿き、雨天には木を刳れる屐を踏む、其の形甚た奇なり。

○煙管は毎に口に啣み、或は手に持ち、如何なる場合も之を措かす、長きを以て貴しとす。機軍（勞働者）は長さ二尺許なれとも、貴人に至りては五尺に至るものあり、近時日本風の吹入りしより、卷烟草の流行盛んにして、烟管も隨つて短きを善しとする傾向あり。本邦人の韓に遊ふもの、必らず先づ四五本を購ふて以て土産とす。

○白麻衣を着し、大笠を被り、更らに白麻布の長さ一尺許りなるものゝ兩端に、小竹片を附し、兩手を以て面を掩ひ、市街を漫歩するものを散見す。是れ喪に居る人なり、彼れ等は喪間必らず葷酒を退くといふ。

○短髪にして白麻衣を着け、同しく大笠を被むり、手に念珠を妻繰るもの、是れを朝鮮の僧侶となす、從來彼等は京城に入ることを許されさりしか、今回本邦日蓮宗の僧某、大に韓廷に説き、其の國禁を破りてより、各所に韓僧の徘徊するものあるを見る。

○機軍の徒といへとも、皆な髭髯を蓄ふ。而して其の濃きを賤しみ、薄きを貴ふの風あり。

○歩むこと、及ひ語ること、概して緩漫。

○坐睡するもの甚た多く、悪臭を發する蒼蠅は、面に充つるも覺めす。甚しきに至りては、日中大道に仆れて眠り、牛馬は自から避けて行く、人敢て怪まず。

○美髯を蓄ふる男子の雪白の袗を穿ち、長煙管を啣みて、悠々寛々途上を漫歩するもの頗る多し。彼れ等は飯時踵を家に回へすの外、終日何事をもなすことなく優遊せり。是れ實に官人の家に養はるゝ食客先生なり、所謂醉生夢死するもの。

是れ等予か滯在中僅かに見聞し得たる者の一斑のみ、其多くは既に昨年來幾多の人士、或は新誌を以て世人に紹介せられたらむも、予は予か親愛なる讀者の中、未見未知の人に對つて報道し紹介せんと欲する微意に外ならさるなり。

倭城臺

駱洞にある旅館東京館を出て、行く一丁にして泥峴（日本居留地）に達す。此地は釜山仁川等の開港場と異なり、韓廷か嘗て清國人に許せる雜居條約によりて、日韓兩國の間に締結せる均霑條約の結果、本邦人の多く京城に雜居せしものゝ、去る十七年の變亂以降、自衞の爲めに集りて、居留地の形勢をなせしものにして、客年以來、韓人の本邦人を信する甚た篤く、跋扈せる清商の漸次減縮せし等の末、通商移住の目的を以て、京城に來る本邦人非常に多く、日に居留地の地歩を堅め、擴張の勢を呈し來り、頃來殆んと商權の大部分を占むるに至れりといふ。

泥峴の中程より右に望む高峰を南山とす。亭々たる老松、概ね赤く、稜々たる山骨、氣自から壯なり。半腹に日本公使館あり、回らすに障壁を以てし、旭日の國旗、中空に翻へるを見る。山麓更に一丘あり、倭城臺即ち是れなり。丘の上數百歩、削立すること數丈、形自然に牙城の趣あり。韓人傳えて曰く、往昔鬼上官加藤清正來りて、丘勢に依り城を作るところと。乃ち登りて京城を下瞰し、肥後守當年の事を想えは、片月の槍を提さげ、蛇目の鎧を戴きて、八道を睥睨したるの風采、髣髴として眼前に來るを覺ふ。

公使館及ひ領事館を訪ふ

一日管長に隨ふて日本公使館に井上公使を訪ふ。是れより鑄字洞にある日本領事館を訪ひ、内田領事に面し、談數次に渉りて歸る。

京城の古物

之を嘗て朝鮮に遊へるものに聞く、京城看るへきもの二あり、曰く大圓覺寺の古碑。寒水石十三層塔是れなり共に近代の物に非す、精巧驚くに足ると。一日、管長を勸め、舌人を携えて旅館を出てぬ。南大門より東大門を貫く大街を鐘路と云ふ。路に巨鐘あり、我か三井寺の鐘よりも大なり。市街の廣さ五十間餘、街頭の家屋太た美麗ならす。加ふるに露店を出すもの多く、雜踏を極む。行く〳〵右側の一陋巷に入る、糞溺狼藉なるところ、土塀將に倒れんとせる家、小庭は實に一個の掃溜然たる所、瓦石紛然の中に、寒水石の十三層塔は立てり。塔の上層三階は、卸されて塔畔にあり。傳え云ふ、往昔加藤清正京城に入りし時、此塔を見て、その精巧に驚き、卸して日本に持歸らむとせしも、一層の重さ幾千斤、終に力盡きて抛却し去れるものなりと。この巍然たる寒水石塔の、一層ことに精密なる佛像を彫み、交ゆるに雲龍禽獸、若くは蟲魚を以てす、

刀痕自在にして行雲流水の如しといふも、敢て過賞にあらず、眞に彫刻の堂奥に詣れるもの。而して其の何百千年を經たるを知らず、雨露に曝せる、猶ほ怨すべし、曾て火を失し塔の半面を焦黒せしめたるなど、希代の珍品、亦た一の保護を與へられず、惜むべきなり。清正の意を繼き、之を本邦に輸送し來り、上野公園噴水清きあたりに移さはやとは、此の塔を見るものゝ異口同音に發するの語なり。予は腰間を探りて筆を出し、塔邊の棚の如きものに氏名年月を書して、この家を出て、更に大圓覺寺の古碑のあるところに至る。大石鼇あり、尾を低れ首を昂げて碑を負ふ。石碑高さ二丈許、石は臘石にして黒色を帶ひ、上に神龍の碑を繞くれるあり。彫刻亦た精妙、形躰頗る雄大、表に銘文あり、明らかに讀む可からず、裏は大圓覺寺之碑と書せり、予等本邦にあつて未た見さる所のもの。

守備軍隊を慰問す

京城を守備する軍隊を後備歩兵第十八大隊とす。客歳事の此地に起りてより、我か十萬の貔貅は、北滿清の野に轉戰し、今や兵戈將に靜まらむとせるに至る間、殆んど一年、假ひ砲煙發し、彈丸飛はさるにもせよ、身を軍籍に措き、足を異邦に留むるもの、焉んぞ一日半晌の安を得んや。予等今や此の地に來る、先つ行ひて守備隊を見舞はさる可からす、是れ亦た實に今回一行か目的の一なれはなり。乃ち管長に隨ふて行く、鐘路大街を歩して路盡くる所、右に折るれは王城門なり、路の左右を韓の諸官衙となす。内に十八大隊分營あり、王城の前廣馬場に韓兵二中隊計の操練あり、將校の服裝奇なれとも美なり、號令進退の如き、總て日本語を以てす、馴れさる所甚だ可笑し、環視する韓人堵の如く、予等亦た其の甚だ妙なるを以て佇むこと少時せり。夫れより分營に就て守備隊本部の所在を問ひ、歩を回らして指示せられし「司譯院」に到る。守衛に刺を通して、長官に面せんことを請ふ。長官營にあらず、副官藤戸中尉出て、應接せらる、乃ち來意を告け、慰問品として寶丹五百包を贈る。中尉長官に代りて謝意を述へられ、今日に至るまで當軍隊も戰時に等しく、嚴重なる軍律の下に服務しつゝ、未た一日の安きを覺えす、爲めに日を卜して一場の講演をも請ひ度けれと、近日は都合ありて其意を得す、御滯京の日數次第にて、又た如何ともなし度きものなりとの事にて。管長は副官に對ひ諄々感慨の在るところを演へ部下の將士、及ひ大隊長へも宜しく傳聲を請ふ旨を述へて歸る。

官立日語學校を看る

朝鮮の教育に就ては、實に云ふに忍ふ可からさるものあり、今は唯少しく改革前後の教育法に就て得たる一二言を記し置かむ。韓人由來教育の何たるを知らす、漢學夙とに入りて儒道盛んに行はれしも、其の儒道を誤解せるや、今日の新文明世界に容る可からさる底の舊慣を墨守し、甚しきに至りては、反つて人倫を害するか如き頑癖に陷ゐらざるなきを保せす。而して又た一般に所謂「漢學先生」なるものを賤しむの弊あり、其故を尋ぬるに、元と教師なるもの彼自から教育の忽かせにす可からさるを知らさるか故に、教育の如何に國家の盛衰に關するを思はさる論なし、僅かに官人の家に寄食し、主家の兒童に四書、或は五經の素讀を教ゆるを以て足れりとなし、其の漢學先生を養ふもの、即ち主人も亦た先生と思はんよりは、寧ろ「傅」の如く或す、又た爾か感せさるを得さるなり、故に共に俱に賤しみ了り、竟に如何ともする能はさるに至る、是れ革以前朝鮮教育の通例なりとす。斯の舊弊惡習を打し一掃し盡さずんは、到底完全なる開國の事擧らす、年以來、日東の新空氣を注入し、稍々改革の實擧らとす、日本顧問官の鋭意厲精なる、亦た與つて力あり。予等の滯在中に、師範學校官制の發布を見るなと、其の實効と云はさるを得ず。教員を賤しむの弊は、延ひて改革後に及ひ、官私兩校共に束脩は勿論授業料を徴收すること能はす、却つて學校より筆墨等を與ふるといふ、若し授業料を納むるか如くんは、一人の入校者を見さるへしといへり。予等は一日官立日語學校を觀んと欲し、朝來旅館を出て、鐘路に到り、交番の巡査に就て道を尋ぬ、巡査懇切に予を導いて七八町の所に到り、指し示して歸り去る。茲に序ななら、巡査の風俗を述へんに、黑羅紗の洋服にサーベルを佩ひたる樣は、如何にも威めしけれと、靴は多く朝鮮の草履を踏み、帽子は四五年前本邦書生の間に流行せし釜形の緣、上にそりたるものを戴く、此日雨降り出せしかは外套を被るやと思ひの外、帽上に傘の形したる小さき油紙を蒙る、其狀頗る妙、然して白本人を見る、恰も主の如く、丁寧に親切に、道案内を爲す。伏魔殿の稱ある大院君の邸宅雲峴宮を一周して、日語學校の門に至れは、早く既に喃々啷唔の聲を聞く。刺を出して教頭長島氏に面し、參觀の事を請ふ。乃ち延ひて一々説明の勞を執らる、壁上高く朝鮮國皇帝の教育に關する　勅諭を掲げ、下に左の如き掲示あり。

生徒銘心要綱

一 奉體教育

勅諭之旨、忠君愛國之念須臾不可忽、諸遵規則、守訓誡、不可苟辱學校之躰面、確守自强之心、與恭順之意、不可苟失爲生徒品格

一 各自重禮節、篤信義、不可苟有悖友誼之行

一 謹言語、愼舉動、不可苟有輕佻踈暴之狀、勉强益智忍耐養德、乃可大成其器、注意飲食、以時起居、自適守衛生之法、乃可以保身躰之清潔健全、

以上七項可拳々服膺者也

開國五百四年四月　大臣副署

見よ、劈頭先つ忠君愛國之念の須臾らくも忽かせにすへからさるを示し。自强之心、恭順之意を確守し、品格を失墜せしめざるへきを說き。勉强忍耐以て其の器を大成すへしといひ。終に揭くる所則ち衞生清潔の法なり。本邦に在つては、蓋し尋常一樣の義に過きさるも、其の韓人に取りては、宛かも雷霆の頭上に轟ける如くに感せむ。蓋し最大最重の語學生たるもの宜しく拳々服膺すへし。學生二級百餘人、年齡十二三歲より三十前後のもの迄あり。教員は本邦人二名、外に韓人の日本語を解するもの二名を傭ふて、譯者に宛て、以て、教授に便せり。學科は日本單語、及ひ小學讀本を教へ、一級生は畧ほ通常の日本語を解す。曩に本邦慶應義塾に留學せる韓人の中、亦た此校に學へるもの多しといふ。長島氏の語る所に依れは、韓人の記臆力は中々に能く、隨分發達の見込なしとせす。然れともまた一を聞て十を知る程の才氣なし。諸般の改革整理の曉に至り、教育法その宜しきに協ひ、教科書等の編纂出來せは、稍〻進步の實効を奏すへし云々。居ること二時、大雨盆を傾けて來る、乃ち辭し去つて旅館に歸る途、桂山に在る乙未義塾學生數百人一樣の扮裝せるに遇ふ、是れ私立學校にして、近時漸く盛大になり行き、始めて春季運動會を催ふせるなりといふ。(未完)

雜報

●大隈伯昔日譚

大隈伯昔日譚は七百數十頁の大冊子なり固より一朝一夕にして之を精讀詳評する能はず然れども其執筆者圓